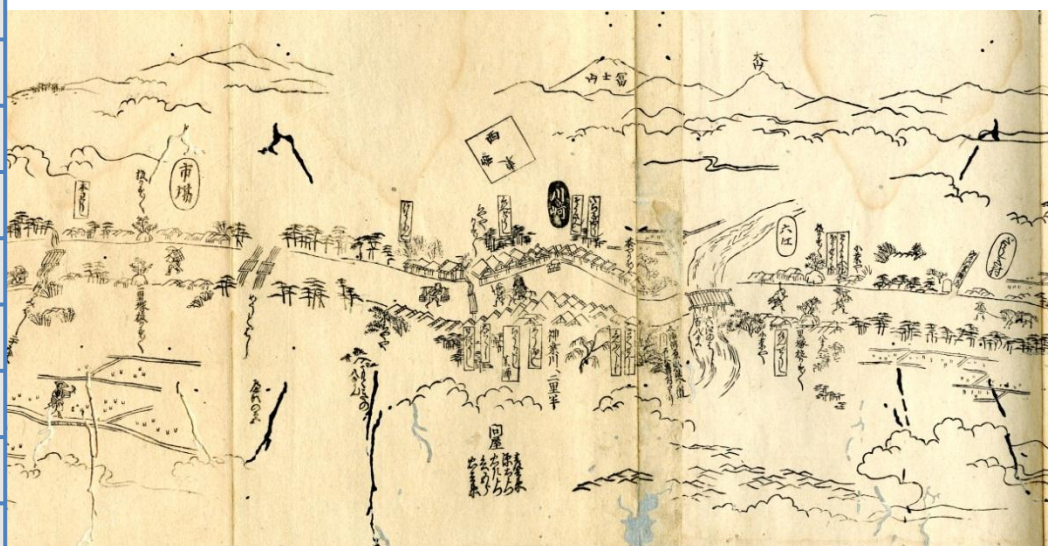


# 川崎宿の成立

川崎宿は『川崎年代記録』によると、元和 9(1623)年に成立したとあります。

同書によると、江戸への往来が次第に頻繁になり、品川、神奈川宿間は五里(一里=約 3.927km)と離れていたため、宿外の町の駄賃稼や宿泊を生ずるようになり、宿の利害に大きな影響を与えることから、その中間に川崎宿の設置が幕府より命ぜられました。しかし、川崎町は宿

になることを反対しました。戸塚宿のように、宿になることによって駄賃稼や宿泊施設を作れる利益



『東海道分間之圖 巻の1』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他 1690年  
〈請求記号：K292/49/1〉 より川崎宿

を重視して積極的であった地域もありましたが、川崎町は薪や馬飼料が不自由な所であり、伝馬勤めを果たせるような馬もなかったため、伝馬宿となれば住民は他の地へ移らなければならなくなるのではという懸念がありました。しかし、川崎代官の小泉吉勝は幕府からの命令であることから、強制的に宿場を設けました。

## 【参考文献】

『神奈川県史 通史編2 近世(1)』 神奈川県県民部県史編集室 神奈川県 1981年  
〈請求記号：K21/16-3/2〉

# 神奈川宿の成立

神奈川宿は、慶長6(1601)年に伝馬朱印状の発行により成立します。神奈川は江戸から京都へ向かう将軍の最初の宿泊地で、神奈川御殿が今の東神奈川駅付近にありました。

神奈川は少なくとも14世紀末から湊として栄えていました。当時の船は帆船のため、風を避けられる山が背後

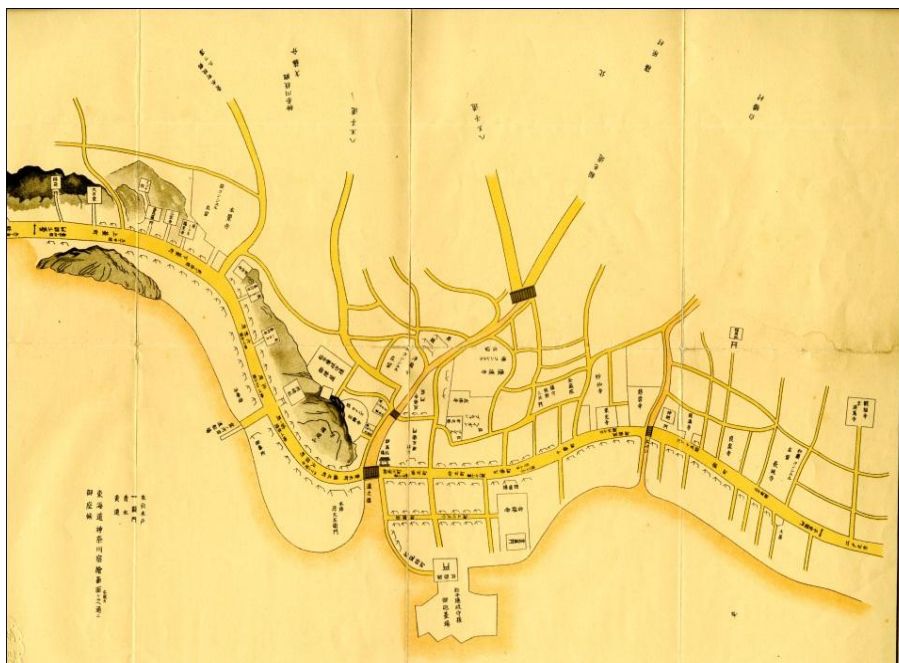
にあることが大切で、権現山などに囲まれた神奈川湊は良港でした。宿場西部の台町は、眼下に海を望む高台に旅籠屋・茶屋が軒を連ねる景勝地として知られていて、広重画『東海道五十三次之内神奈川』の題材にもなっています。海産物も豊富で『金川砂子』には神奈川名産として、車海老・アイナメ・モイオ・オオ/などの魚貝類が描かれています。

神奈川宿の名所として、浦島太郎伝説のある観福寺があります。参道入口には、亀形の台座上に「浦島寺」と刻まれた石塔が立っていました。また、伝説に因んで亀甲煎餅も宿の名物となりました。

【参考文献】

『神奈川県史 通史編 2 近世(1)』 神奈川県県民部県史編集室編 神奈川県 1981年 <請求記号: K21/16-3/2>

『神奈川の東海道 上』 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会企画・発行 1999年 <請求記号: K68/330/1>



『横浜市史稿 附図』 横浜市編 1932年

<請求記号: K21.1/5/10>より

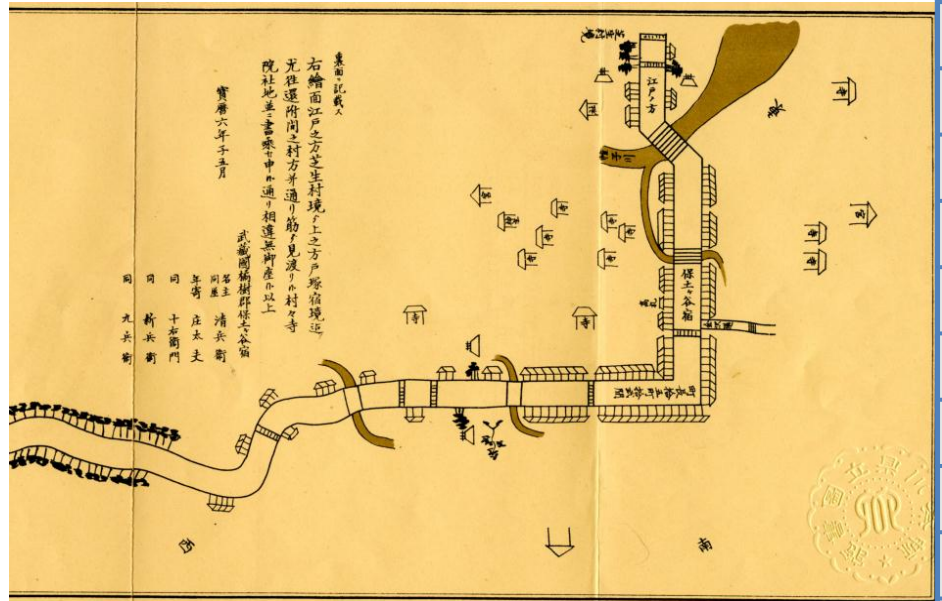
『東海道神奈川宿絵図面 (萬延文久の交)』: 1860~1861年頃



# 保土ヶ谷宿の成立

保土ヶ谷宿は、慶長6(1601)年に伝馬朱印状の発行により成立します。宿場は保土ヶ谷町・岩間町・神戸町・帷子町から成り、『新編武蔵風土記稿』によれば、近世始めには保土ヶ谷

町(元町)と、帷子町・神戸町は十八里(約2km)離れていました。しかし不便であったためか、慶安元(1648)年に、それまで西北の地を



『横浜市史稿 附図』 横浜市編 1932年  
<請求記号: K21.1/5/10>より  
「保土ヶ谷宿絵図面(宝暦6年)」: 1756年頃

海道ルートを変更したとあります。なお、以前のルートについては、根拠となる文献・絵図がないため確定されていません。そして変更の際、保土ヶ谷町を神戸町・帷子町の近くに移転し、さらに1660(万治3)年に岩間村を移して、宿場が完成します。そのため、成立当時はまだ町並みが整っておらず、伝馬などの負担も円滑を欠いていました。

広重画『東海道五十三次之内保土ヶ谷』の題材になった帷子橋は、移転後の保土ヶ谷宿が新町と呼ばれたため、新町橋とも呼ばれ、長さは十五間(約27m)でした。

【参考文献】

『東海道保土ヶ谷宿』 横浜市ふるさと歴史財団編 横浜市歴史博物館 2011年 <K06.1/45/2011-10>

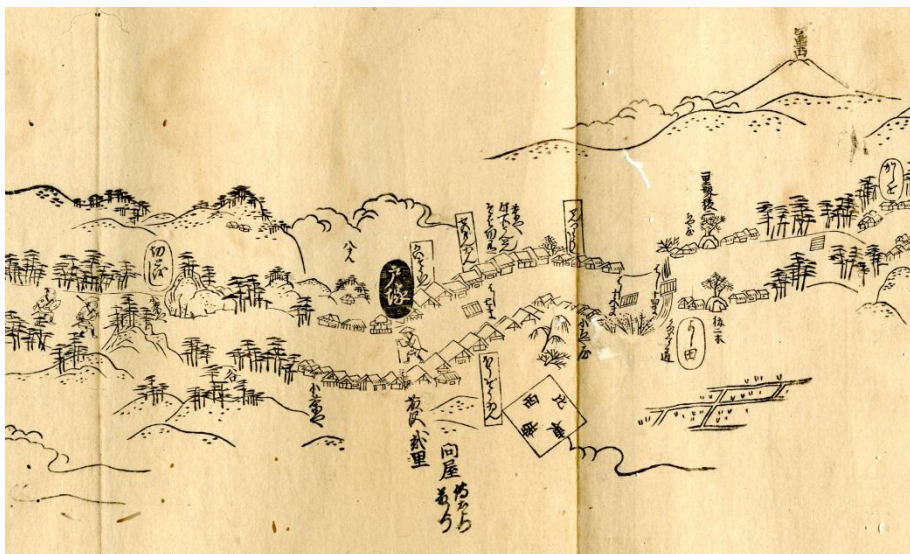
『神奈川の東海道 上』 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号: K68/330/1>

『東海道戸塚宿場町の成立』 浅香幸雄著 東京教育大学 1960年 <請求記号: K68.1/75>

『新編武蔵風土記稿 第3巻』 芦田伊人ほか校訂 雄山閣 1996年 <請求記号: K291/131A/3>

# 戸塚宿の成立

戸塚町は、慶長6(1601)年の伝馬朱印状の発行時に宿場に指定されませんでしたでしたが、駄賃稼を行っていました。宿場になると地子(屋敷税)が免除されますが、公用旅行者へ無賃で伝馬を提供しなければならぬなど負担が重く、一般旅行者や荷物の運送による利益で補っていました。



慶長8(1603

『東海道分間之圖 巻の1』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他  
1690年 <請求記号: K292/49/1> より戸塚宿

)年、藤沢宿は戸塚町の駄賃稼の禁止を幕府に求め、幕府は伝馬の負担なしに、駄賃稼を行うことを禁じます。そこで戸塚町は、宿場になることを願い出て藤沢宿・保土ヶ谷宿に同意を求めます。まだ宿場の設備が整っていなかった保土ヶ谷宿は、伝馬負担の距離が短縮されるため賛同しますが、古くからの門前町である藤沢宿は、鎌倉方面などの商圈の競合を嫌って反対します。そのため戸塚町は翌年、さらに人馬継立免許願いを出します。それによると、伝馬の負担なしに駄賃稼をする町は20か所余りもあると述べています。結局、同年に戸塚町は宿場に指定され、これ以降、伝馬を負担しない町は、駄賃稼ができなくなりました。

【参考文献】『神奈川県史 通史編2 近世(1)』 1981年 <請求記号: K21/16-3/2>  
『東海道戸塚宿場町の成立』 浅香幸雄著 1960年 <請求記号: K68.1/75>



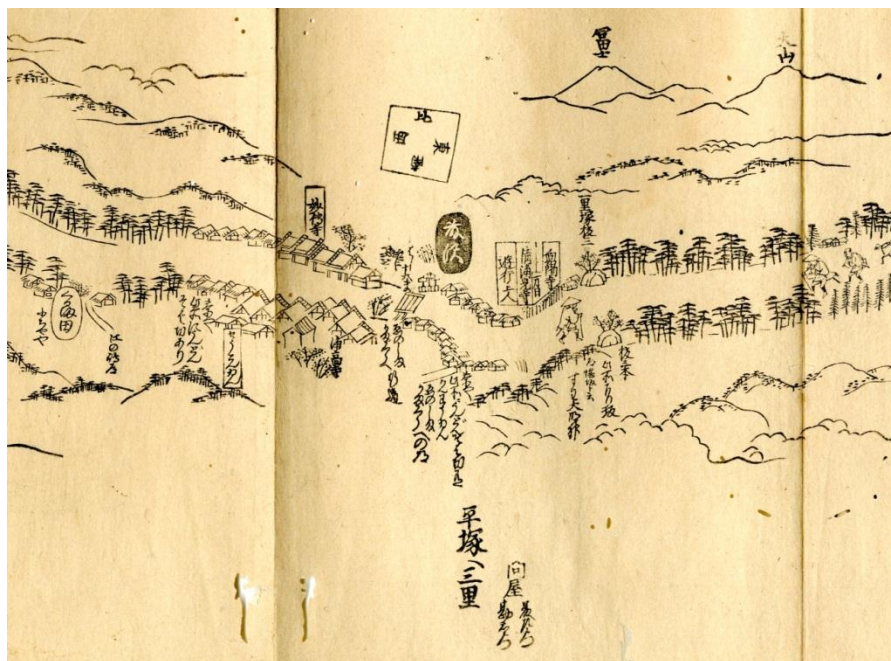
# 藤沢宿の成立

藤沢は、時宗総本山の清浄光寺(遊行寺)の門前町として栄えて来ました。寺の創建は1325(正中2)年とされ、室町時代には旅人が来ていたと思われます。また大山道や八王子街道、厚木道、江の島道への分岐点に当たり交通の要衝でもありました。

徳川家康は巡視の目的で藤沢御殿を設置し、慶長5(1600)年から宿泊しています。また御殿近くに大久保陣屋を置き、周辺の支配に当たらせました。慶長6(1601)年には伝馬朱印状が発行され、藤沢宿が成立しました。

大名や公家、役人が泊まる本陣は当初、大久保町の堀内家が務めました。延享2(1745)年に火災で焼失し、坂戸町の蒔田家に移ります。また旅籠は、部屋数3、4室の小規模なものが6割を占めていました。

藤沢宿は商家も多くありましたが、度重なる火災で土蔵造りが増え、土蔵は藤沢商人の象徴とされました。



『東海道分間之圖 巻の1』 遠近道印著 絵師 菱川師宣他  
1690年 <請求記号: K292/49/1> より藤沢宿

## 【参考文献】

『神奈川の東海道 上』 神奈川東海道ルネッサンス推進協議会編 神奈川新聞社 1999年 <請求記号: K68/330/1>  
『古地図・古写真で見る東海道五十三次』 今井金吾編 新人物往来社 2002年 <請求記号: K68/374>